読書

郷土の本棚

東日本大震災と被災・避難の生活記録

吉原直樹、仁平義明、松本行真編著

絆意識に地域の落差鮮明

「東日本大震災を経て『絆』は本当に強まったか」と問われたら、どう答えるだろうか。それぞれの立場や体験、ものの見方によって、回答は異なるに違いない。

本書は、震災に関する論文集。その一つである仁平義明東北大名誉教授の調査では、「絆」に対する被災県と首都圏間の意識に、くっきりとした落差が出たことに驚かされる。

調査時期は震災から1年半後の2012年9月。117人（平均39・4歳）を対象に行った。

設問の一つは、被災地内外の「信頼関係や心の結びつき」は、震災前と比べてどう変化したか―を尋ねるもので、強弱の程度により、5段階で回答する。

東京、神奈川の回答者は、ややを含む「強まった」が約6割と最も多かった。理由は「あらゆるメディアで繰り返し報道されることにより、被災地への思いが強くなったと思うから」など。報道等の間接体験を根拠としたケースが目立つ。

一方、被災3県では、ややを含む「強まった」は、わずか約2割しかない。その代わり「一部では強まったかもしれないが、一部では弱まった」が圧倒的に多く、7割以上を占めた。

理由は「浸水した家の掃除などをボランティアに手伝ってもらい本当にありがたかった。そのような人もいれば、被災地ツアーに来て『家の基礎しかないな』と笑い声をあげる人もいた（本県学生）」など。風評被害も、ネガティブな理由として挙がった。

本書で「楽観的」と指摘された首都圏に対し、被災地の現実は複雑な様相を帯びていることを表しているようでもある。

ほかにも本書は、福島の海辺から内陸へ避難した人々の食卓から郷土食が消えつつあることを示した論文など、各分野の研究者31人の計28編を収録する。巨大災害の教訓を将来に生かす際に、学問の洞察力が果たす役割は大きい。

（六花出版・8640円）